

二〇一一年度 光塩女子学院中等科【第一回】

国語基礎入試問題

二〇一三年二月一日（火）実施

《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に、受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

一 次の各設問に答えなさい。

(1) 次の各文の——部の読みをひらがなで書きなさい。

- ① もめごとを裁く。
- ② 筋道を追つて考える。
- ③ 事業の規模を広げる。
- ④ 手本の絵を忠実に写す。
- ⑤ 裏方に回つて会の運営を助ける。

(2) 次の各文の——部のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、⑤は送り仮名もひらがなで答えなさい。

- ① テンランカイが開かれる。
- ② 各国のシユノウが集まる。
- ③ 生命のシンピを探る。
- ④ あのカンバンは遠くからでも目立つ。
- ⑤ 災害の報道に胸がイタム。

(3) 次の各文の内容と最も関係が深い言葉を下のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じものを二度使うことはできません。)

- ① 鍵を探し回っていたが、結局ポケットにあつた。
- ② 体操選手が鉄棒から落ちてしまった。
- ③ けんかした二人は、今では大の仲良しだ。
- ④ 読みたかった本を偶然プレゼントされた。
- ⑤ 突然、友達の転校の知らせを聞いた。

ア	雨降って地固まる
イ	弘法にも筆の誤り
ウ	棚からぼたもち
エ	灯台下暗し
オ	寝耳に水

(4) 次の()に最もふさわしい言葉を後のア～カから選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じものを二度使うことはできません。)

- ① 授業中はマスクを着用してください。()、マラソンの時は外して構いません。
 - ② 肉まんは蒸し器で温めてください。()、電子レンジで加熱してください。
 - ③ 昨晩はたくさん流星の出現が期待されていた。()、夕方から雨が降つてしまつた。
 - ④ 一日中パソコンの画面を見ていた。()、目が疲れてしまった。
 - ⑤ スポーツには様々なルールがあります。()、サッカーではゴールキーパー以外は手を使えません。
 - ⑥ 両者の対戦成績は二勝二敗だ。()、実力に大きな差はないと言える。
- ア あるいは イ しかし ウ だから エ ただし
オ つまり カ 例えば

(5) 次の〈書き出しの文〉と〈結びの文〉との間にあるア～エの文を、意味が通るように並べかえたとき、意味の通る順になるものはどれですか。後の1～4から選び、番号で答えなさい。

〈書き出しの文〉 人生においては何事も偶然である。

- ア だがもし一切が偶然であるなら運命というものはまた考えられないであろう。
- イ このような人生を我々は運命と称している。
※ 称する：名づけてよぶ。
- ウ もし一切が必然であるなら運命というものは考えられないであろう。
- エ しかしまた人生においては何事も必然である。

〈結びの文〉 偶然のものが必然の、必然のものが偶然の意味をもつてているゆえに、人生は運命なのである。

1 ア→エ→ウ→イ

2 イ→ウ→エ→ア

3 エ→ウ→ア→イ

4 エ→イ→ウ→ア

〔二〕次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

相手の話を聞く場合に、ただただ何でも受け入れてしまうというのは、必ずしもよい聞き方ではありません。何が事実で、何が事実でないか、といったことに気をつける必要があります。例えば、ある人物について、誰かが「ひきょうだ」と言っていたとします。しかし、だからといって、自分もその人物をひきょうだと思いついたとすれば、「ひきょうだ」はおそらく間違いです。「ひきょうだ」というのは、そのことを言っていた人の個人的な感想にすぎないのであって、本当は何か誤解があつたのかもしれません。実はすぐくいい人なのかもしません。人の話を鵜呑みにするのはよくないことです。何が事実で何が意見なのか、を見極める必要があるでしょう。

これはうわさ話などの日常の会話だけではありません。ニュースを見るときでも同じですし、インターネットでいろいろな情報を得る場合でも同じです。ある情報があつたとして、それが、本当に事実として理解していいのか、それとも、あくまで一つの意見にすぎないのかを吟味してみる必要があります。

さて、では、事実と意見とは何が違うのでしょうか。事実とは誰もが共有できる情報です。一方、意見とは個人的な観点による情報で誰もが共有できないものです。例えば、

この本はおもしろい。

という文は人によってどう感じるかが違うので、事実とは言えません。ただし、仮にAさんという人がこう言つていたとして、「Aさんがこの本はおもしろいと言つていた」のような文になれば、事実と言えます。また、一方、

この本は五〇〇円だ。

というのは事実です。誰が確かめても変わらないことだし、その情報は共有できるからです。

①事実か意見かを確かめる便利な方法はあるのでしょうか。一つの基準として使えると思われるのが、「～と思う」をつけてみるというテストです（「～と思う」テストと呼びましょう）。「～と思う」をつけてみて、意味が全く同じなら意見、意味が違つてくるなら事実と考えて大体よさそうです。（中略）

「～と思う」というのは、個人的な情報ですよ、といふことを明言する表現です。従つて、もともと個人的な意見の場合には「と思う」をつけても変わらないのに対し、客観的な事実を問題にする情報の場合には、その意味するところが変わってきます。

私たちが話をする場合、事実ならば受け入れなければなりませんが、意見は必ずしもそうではありません。個人的な情報だからです。よく言われるようくに、人の話を聞くときに、「事実か意見か」に注意する必要があります。

ただし、事実と意見というのは実は簡単に二つに分けられるものではありません。

というのは、ものにはとらえ方があるからです。例えば、ある人が話をしているとします。その場合に、その動きを「訴えている」「語っている」というのか「おしゃべりしている」というのか「雑談している」というのか、どういう言葉を使って表現するかで違ひがでてしまします。もちろん、「口やその周りの器官を動かして言語音を発している」などといふこともできますが、ふつうの言い方ではありません。それに、言語音とは何か、などとつきつめるとそれでもやつぱり解釈が入る余地があります。最終的には「常識的」な判断ということに落ち着かざるを得ないのですが、この世の中のことを描写する場合には、何らかの「判断」が入ってしまうということは否定できません。純粹な客観的事実などというものは、本当にあるのか、これは考え方によつては大問題なのです。

このことは、因果関係にも関わります。例えば、

八足す丸は、一〇の位に繰り上がるから、一七という二桁の数になる。

という文があるとします。「一〇の位に繰り上がるから」という因果関係は、数学的な論理によるわけですから、確かに事実と一体化していると言つていいくかもしれません。しかし、

彼はそれを聞いたから怒り出した。

という場合はどうでしょう。「彼はそれを聞いた」というのは「事実」と認定できるとします。「彼が怒り出した」も「事実」として認定できるとします。しかし、この二つのできと因果関係で結びつけられるかどうかは②ホショウされていません。因果関係には解釈が入る余地があり、無条件には「事実」とは言えないのです。ほかのこともあるが、それを聞いたことをきっかけとして怒り出した、というような場合などは、判断がむずかしいところでしょう。

このように、事実ということが仮に言えるとしても、それをどう組み立てるかはむずかしいのです。ある結論があるとして、本当にそれが判断の根拠と密接につながつているかどうかを点検しましょう。

論理関係のことが出てきたのですが、原因理由をどうとらえるのかということはむずかしい問題です。例えば、苦手だから勉強しないのか、勉強しないから苦手なのか、あるいはそのどちらもが成立するのか、といったことは誰もが考え込んでしまう問題で

す。

実は、こういう見方でいろいろな情報を点検することは非常に大切なことです。場合によつては、「事実」として提示されたものについても、しつかり点検することが必要です。次は、谷岡一郎氏『「社会調査」のウソ——リサーチ・リテラシーのすすめ』

(文春新書) で述べられている新聞記事(産経新聞夕刊一九九四・四・八)の例です。

「畠^{たたみ}多いほど子供増加／円滑な住宅供給訴え／子育て負担の軽減に道」

畠^{たたみ}の数が多いほど子供の数も多い——。八日公表された平成五年版厚生白書は、「こんな分析結果を基に、子供を増やすには「公共住宅などの円滑な供給が必要」と訴えている。／(中略)一人当たりの畠^{たたみ}の数(住宅の広さを畠^{たたみ}に換算)が二・九畠とトップの富山は、一世帯(世帯主が四十九歳以下)当たりの子供(未成年)の数も一・三人と最も多かった。／全国的にもある程度の相関関係がみられ、(後略)

この記事によれば、白書は「家が狭いから子供が少ない」という主張をしていることになります。そのための統計的なデータ(事実)もあるといえます。

しかし、これには大きく二つの問題があります。谷岡氏は、③どちらが原因なのかということを「ちやまぜにしてはいけないという指摘^{しべき}をしています。一つは、「畠^{たたみ}の数」が多いほど「子供の数」が増えるというより、【】と考える方が普通である」という考え方です。また、同氏によると、「人口過疎地域は、その地域の文化的伝統により、都会より子だくさんの家庭が多い。また、それらの地域は、大都市に比べ家のスペースが十分にあることが多い。従つて「子供の数」も「畠^{たたみ}の数」も同じ地域文化の中から生じた結果であつて、相関があつてもおかしくない」という批判もできます。要するに、「家が狭いから子供が少ない」ではなく、「非密集地^{ひみつしゆうち}は、家が広い。そして、非密集地^{ひみつしゆうち}は、子供が多い」というように、別の要因から、相関があるよう見えただけだ、ということです。

このように、ある調査があつて、そのデータが事実であるにしても、それを根拠^{こんきよ}としてどのような結論を出すかということは、しつかり点検をすることが必要です。(中略)

同じことは、例えばテレビのニュース画像などを見る場合でも問題になります。画像ですから疑いようのない「事実」のはずですが、それが、⑤現実のすべてだと考えるホショウはないのです。

例えば、戦場になつた町で兵隊が負傷した住民の治療^{けいりょう}をしている写真があつたとしましよう。兵隊が住民の治療^{けいりょう}をしている姿、

これは確かに事実です。しかし、すぐ近くにはその軍隊の攻撃によつて間違つて殺されてしまった子供たちの死を嘆く親たちの姿があるのかもしれません。しかし、そちらを写さないで、その軍隊のいいところだけを写す、ということもできます。というのは、伝えられる情報には限りがあるからです。

撮影された情景は確かに「事実」でしようが、撮影されていない「事実」もある。こうことに私たちは気をつける必要があります。情報を伝える場合、多かれ少なかれ、選択が行われます。すべての様子を余すところなく映し出すことなど、人間にはできないのです。ニュースの文にしても同じです。新聞にもテレビにも伝えられる情報の量は基本的に有限です。このように、情報伝達に量的限界がある以上、巧妙にその「事実」を選ばないで、別の「事実」を選んで伝える、ということは可能です。

これは、話を聞く場合でも同じです。「事実」としての情報は、多くの場合、情報の断片ではないのです。そして、その情報の断片がどの程度現実を反映しているのかはわからないのです。だから、「事実」であっても、それを吟味することが必要です。これは大変むずかしい判断を要することです。

「聞く」というと、受動的なことのように、すなわち、何かを積極的にするのではなくて、単に受け身的に聞くことだと考えがちではないでしょうか。しかし、そのようなことは決してありません。相づちを打つたり応答をしたり、感想を加えたりすることも必要です。さらに、質問をしたり確認をしたりすることも必要です。

そしてまた、その内容についても、単に鵜呑みにするのではなく、吟味することが必要なのです。まさに「聞く」ととも、聞き手が積極的に関わらなければならない⑥動的なことと言えます。私たちは単なる受信機ではありません。受信した情報を分析し、検討することができますし、そうすることが本当に「聞く」ということなのです。

(森山卓郎『コミュニケーションの日本語』による)

※注　吟味：細かいところまで、よく調べること。　余地：ゆとり。 よゆう。　相関：たがいに関係があること。

問一　――①「事実か意見かを確かめる便利な方法」として筆者が提案している方法によつて、「意見」と判断できるものを次から

すべて選び、記号で答えなさい。

ア 夕日は美しい。　イ 駅前に交番がある。　ウ 運動はよい気分転換になる。

問二 ——② 「ホショウ」を正しく漢字に直しているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 保障 イ 保証 ウ 補償

問三 ——③ 「どちらが原因なのかということを『ちやまぜ』にしてはいけないという指摘^{してき}」に注意をして、空欄【 ④ 】に入れる文を考えて書きなさい。ただし、「子供の数」という言葉を使って答えること。

問四 ——⑤ 「現実のすべて」と対照的な意味で使われている五字の言葉をこの後の文中から抜き出して答えなさい。

問五 空欄^{くうらん}【 ⑥ 】にふさわしい漢字を答えなさい。

問六 この文章を読んだ人の発言を次に記します。本文を正しく読み取っているものには○を、本文の理解に誤りがあるものには×を書きなさい。

ア インターネット上の意見は、根拠^{こんきょ}が書かれていないものも多いので注意が必要ですね。筆者が指摘^{してき}しているように、統計的なデータを示している主張であれば、信頼^{しんらい}に値^{あたい}すると言えられます。

イ 筆者も注意を促^{うなが}しているように、最近はパソコン上で簡単に、しかも巧妙^{こうみょう}に画像を修整^{さつせい}することができます。画像を示されたとしても、撮影された情景を現実の出来事と信じないことが大切ですね。

ウ ある番組の街頭インタビューを見ていたら、答えた五人のうち四人が法案の改正に賛成していました。だからといって、「世の中のほとんどの人が改正に賛成している」と考えない方がよいということですね。

エ 「聞く」ということは、相手の言うことを無条件に受け入れることではないのですね。これからは話の内容を自分でよく判断し、時には疑問点について相手に尋ねるようにしようと思います。